

女子英学塾における教育実践の成果に関する一考察

－津田梅子のねらいと初期卒業生の進路－

ママトクロヴァ・ニルファル

キーワード：津田梅子、女子英学塾、教育のねらい、教育の成果、卒業生の進路、女性の自立、女性の職業、
教員養成

【要旨】 本論文は、1900（明治33）年に津田梅子によって創設された女子英学塾の初期の卒業生の進路を分析することにより、津田の教育理念や同塾の教育がどのような形でその成果を結実させ、日本の女性の「自立」に如何に貢献したのかを考察するものである。

津田梅子は、女性に対する高等教育は制度的に確立されておらず、女子高等教育機関は皆無に近かった時代に、つまり1900（明治33）年に「女子英学塾」を創設した。女子英学塾の目的は、女性に高等教育と専門知識を与えることによって女性の自立をはかるとともに、さらに女性の中等教員を養成し、女子教育の普及と発展に貢献することにあった。女子英学塾は1904（明治37）年に専門学校となり、多数の有為の女性を社会に送り出し、女子高等教育機関として日本社会に多大な貢献を残すこととなる。

家族制度の下で女性の性別役割観および女性に対する良妻賢母教育の理念が確立していた当時において、女子高等教育もこれらの制約を強く受けざるを得ないのが現実であった。しかし、このような実情においても、津田は独自の教育思想と教育方法をもって女性に専門的知識を与えたのであり、女子英学塾は、女性の自立と地位向上について最も意識した教育機関の一つであったといえる。このような津田の教育思想に着目し、本論文では津田が明治後期の日本の女性の地位をどのように認識し、どのような目的から女子高等教育機関を創設したのか、また生徒たちにどのような学習の効果を期待し、同塾の卒業生たちはどのような進路へと進んだのかを中心に考察する。

はじめに

本論文は、1900（明治33）年に津田梅子によって創設された女子英学塾の初期の卒業生の進路を分析することにより、津田の教育理念や同塾の教育がどのような形でその成果を結実させ、日本の女性の「自立」に如何に貢献したのかを考察するものである。

女性の中高等教育がようやく整備されたものの、その高等教育が幅広い理解を得るのにはきわめて困難な明治期後半において、津田梅子は女子高等教育機関の創設を構想し、ついに1900（明治33）年に女子英学塾を創設するに至った。女性に対する高等教育は制度的に確立されておらず、その機関が皆無に近かったこの時代に、津田は女子英学塾を創設することによって日本の女子高等教育を開拓したのであった。女子英学塾は1904（明治37）年に専門学校となり、多数の有為の女性を社会に送り出し、女子高等教育機関として日本社会に多大な貢献を残すこととなる。

確かに、1890年代後半には、キリスト教系の女学校の中等教育課程である本科に高等科を付設する学校がいくつか現れ¹⁾、1900年代に入ってから、民間人によって本格的な女子高等教育を

意図した学校が創設されはじめることになる。すなわち1900（明治33）年に女子英学塾、東京女医学校、女子美術学校が創設され、翌年に日本女子大学校が創設され、これらの学校は次第に名実ともに女子高等教育機関として発展する。

家族制度の下で女性の性別役割観および女性に対する良妻賢母教育の理念が確立していた当時において、女子高等教育もこれらの制約を強く受けざるを得ないのが現実であった。しかし、このような実情においても、津田は独自の教育思想と教育方法をもって女性に専門的知識を与えたのであり、女子英学塾は、上述の諸学校の中でも、女性の自立と地位向上について最も意識した教育機関の一つであったといえる²⁾。このような津田の教育思想に着目し、本論文では津田が明治後期の日本の女性の地位をどのように認識し、どのような目的から女子高等教育機関を創設したのか、また生徒たちにどのような学習の効果を期待し、同塾の卒業生たちはどのような進路へと進んだのかを中心に考察する。

津田梅子に関する先行研究を確認すると、その大部分が伝記的なものに留まっており、また津田とアメリカの社会や文化との接点に重点を置いた研究が多くみられる。本論文と関連する研究としては、青井和夫編著『高学歴女性のライフコース —津田塾大学出身者の世代間比較—』（勁草書房、1988年）があげられる。同書は、1916（大正7）年から1982年卒の卒業生を対象としたインタビュー調査をもとに書かれたものであり、おもに女子英学塾（津田塾大学）卒業生の世代間のライフコース全般の変化を分析しており、同塾卒業生の進路を体系的に明らかにしたものではない。このように、津田の教育理念と初期の卒業生の進路を関連付けた研究は管見の限り見当たらない。

以上のような先行研究の状況を踏まえ、本論文では津田の教育理念と女子生徒の卒業後の進路をあわせて分析し、女子英学塾の教育の成果を分析する。まず、津田の教育のねらいと育成すべき女性像を確認し、次に生徒に対する彼女のメッセージを検討し、高等教育を受けた女性に何を期待したのか明かにする。最後に、同塾同窓会報によって初期（1905年から1912年まで）の卒業生の進路状況を分析し、その実態を明らかにする。これらの考察により、卒業生たちが女子英学塾で受けた教育を、家庭や社会に対してどれほど還元できたのか、その一端が明らかにできると考える。これは、津田が女子英学塾において女性に与えた高等教育がどのような形で結実したかを具体的に検討することでもある。

1. 津田梅子の教育のねらいと「女性像」

ここでは、まず津田の教育理念を確認し、次に津田が生徒に示した「女性像」について検討したい。

津田梅子の教育理念や女性像は女子英学塾を創設した背景に存在していた。言い換えると、同塾創設はとりもなおさず、彼女の理念の発露でもあった。11年にわたるアメリカ留学から帰国した津田は、日本女性の社会的地位の低さに直面し、非常に驚かされた。それは、家族制度に基づく男性が握っていた絶対権、女性の男性に対する依存関係、女性の就業状況、法律上の男女の不平等などであった³⁾が、津田がそのような女性の立場を改めるために目指した戦略は、女性に教育を与えることであった。そのためには全国的な女子教育の普及が前提となり、高等教育を受

けた女性指導者を養成する必要があった。津田の女性の高等教育および女性の役割に対する見解を以下の引用文から確認したい。

私は女性に対する高等教育は必要不可欠と考える。高等教育を受けた女性に偉大な影響が期待できる。女性の高等教育は現在の日本の進歩の中で一番遅れている分野である。家庭の中に閉じ込められている女性に、キリスト教の宣教師も接近することができないし、新しい教育の主張者が影響を与えるのも困難である。私自身も、女性はただの家庭の飾りものや、男性のおもちゃのような存在であり続けるより、世界において重要な役割を果たすべきと思う⁴⁾。

このように津田は、女性に対する高等教育と女性の地位向上を一体のものとしてとらえていたのであり、この点が塾創設の最も重要な背景であった。そして津田は、英語教員を務めた華族女学校における上流階級の気風や「女性の従順さ」を育成する教育理念、女子中等教育が普通教育に特化されていたことなどに対する不満も契機として、女性に高等教育と高度な教養を与え、広い視野、特に西洋思想の知識をもつ「良い教師」の育成をねらいとし⁵⁾、女子英学塾の創設を構想したのであった。

次に、津田が目指した「女性像」について検討する。津田は、何よりも「オールラウンド」な女性の育成を目指していた。具体的には、女性に英語・英文学を通して専門の知識を習得させるとともに、高度な教養を与えることであった。この点について津田は次のように述べている。「専門の学問を学びますと兎角考へが狭くなるやうな傾向があります。一つの事に熱中すると、他の事柄を忘れがちになるものです。英語を専門に研究して、英語の専門家にならうと骨折るにつけても、完たい婦人となるに必要な他の事柄を忽せにしてはなりません。完たい婦人即ち all-round women となるやうに心掛けねばなりません」⁶⁾。

この発言からも明らかのように、津田は英語を専門的に教授することだけに満足せず、何事にも一定の理解をもつ「オールラウンド・ウーマン」の育成を目指していたのである。女子英学塾は英語を教えることが主な目的ではあったが、女性の教養をも高めることを目標に掲げていた。女子生徒は、英語・英文学を学ぶことによって専門の知識を習得するとともに、英語・英文学を通して欧米の思想を理解し、視野を広め、見識も高めることができ、さらに、女性の本来の立場を自覚し、社会的活動の実力を身につけるという思想であった。このように津田は、日本女性の地位向上のために女性の教養を高めることの必要性を確信していたのであった。

さらに、日本の女性に欠けているのは、自信と独立心であると津田は実感し、その解決のためには「精神力を鍛錬」することが必要であると考えていた⁷⁾。このため、津田は生徒たちに自ら判断し、決意し、実行することを求め、その力を付ける訓練を行おうとした。自ら判断し、実行に移して初めて責任感が生じることを認識していたからである。津田は、新しい時代をリードすることができるのは、自主的に行動し、独自の思考を展開し、行動の結果に責任をもてる、強くたくましい女性であるという認識に基づいて、そのような女性を育成することを目指したのである。

さらに、津田はある程度経済的に自立した「職業婦人」の育成にも力を入れていた。津田の意図は、女子英学塾において女性に高等教育を与えるとともに、女性の教員を養成し、その結果と

して、少しでも女性の社会進出と経済的な自立を促がすことにあった。

以上のように、津田が理想としていた「女性像」とは、全面的な知識を取得したオール・ラウンドな女性、判断力や意思の力などを含め精神力が強く、独立心のある女性、そして社会に進出し、ある程度経済的に自立した女性であった。

2. 1900年代の女性の社会的状況

女子英学塾の初期の卒業生の進路を考察するにあたり、1900年代初頭の日本における女性の社会背景に留意しておくことが必要と考える。まず、第1は、女性の就職状況と職業観についてである。家族制度下の強固な性別役割観に基づき、職業の名に値するものはすべて男性に独占されていたこの時代に、女性が家を離れて仕事をすること、さらに社会的自立を獲得することはきわめて困難であった⁸⁾。女性に対して、産婆、女医、看護婦、電話交換手、速記者、婦人記者、事務員などといった新しい職種が開かれつつあったものの、女性の就業率は依然として非常に低く、明治期の女性の職業は女性教員と「女工」にほぼ限られていた。また、家事労働の時間的負担、教育の不足、男性に扶養されるものという家族制度の規制など、さまざまな制約が女性の職業の道を妨げていたのであった。一方、女子英学塾の目的の基軸は中等教員を養成することであり、同塾は創立5年後の1905（明治38）年に「英語科」教員の無試験検定の資格を取得した。上述したような女性の職業観や就業状況の下で、女子英学塾の卒業生はどれだけ教員として就職し、社会進出を貫徹できたのであろうか。

第2は、当時の結婚観、女性の結婚年齢と結婚率、そして性別役割観についてである。簡潔に述べると、家族制度が確立していた明治期後半において、女性は必ず結婚し家庭を守ることが求められていた。すなわち、夫に従属的に仕え、その後継者である子供を養育することが女性の役割とみなされ、「女の幸せは結婚」という通念が強く存在していたのである⁹⁾。なお、大正期半ばではあるが、女性の結婚年齢と結婚率を東京府立第一高等女学校卒業者の場合に限定して確認すると、20歳未満で10%の者が結婚し、もっとも高い割合は20歳と21歳の16%ずつで、24歳までに全体の81%が結婚している¹⁰⁾。このような性別役割観、結婚観の下、高等教育を受けた女性は職業と結婚の狭間でどのようなライフサイクルを形成し、あるいは形成せざるを得なかったのであろうか。

3. 津田梅子の卒業生に対する期待

上述したように、女子英学塾が初期の卒業生を社会に送り出した1900年初頭においては、女性の専門的な職業は皆無に近く、女性は必ず結婚し、家庭と子育てに専念する役割を担うという状況にあった。このような状況下で津田梅子は卒業生に対して何を期待し、どのような役割と責任を求めたのであろうか。ここでは、津田の毎年の卒業式の式辞や同窓会報に寄せた卒業生向けのメッセージからその実際を明らかにする。

次のメッセージは、1906（明治39）年の卒業式における津田の挨拶の一部である¹¹⁾。

よく覚えておいてください。蒔かれた種は豊富に実らなくてはならない。そして、ここで

受けた知識は必ず加算されてほかの人に伝わらないといけない。

中略=引用者) 女性の役割と責任は大きく変わったといえる。従来の古い訓練課程はもはや十分ではなくなった。教育を受けている女性にとって、とてもよい機会は、社会事業や慈善事業、何よりもまず家庭の問題を正しく解決することにある。これらは皆さん一人ひとりが直面する問題である。

皆さんがこれから送るのは教師としての人生であれ、主婦として人生であれ、皆さんに期待することは、この学校で身に付けた思想と教えを実行することと、皆さんに与えられた教育の目的を満たすことである。

津田は近代化を遂げようとしている日本において女性の役割が変化したことを強調し、女性は男性と同様に社会の変化に敏感となり、それに対応していかなければならないことを強調している。そこで卒業生には、女子英学塾で身に付けた知識、能力、思想などを、広く他の女性にも伝えることを求めたのである。ここで着目したいのは、津田は女性に対して必ずしも社会に進出することのみを期待していなかったことである。事情が許す限り、学校の教員やその他の職業に就いて、社会の発展に尽力することを理想としていたが、たとえ家庭に入って「主婦」となる場合でも、卒業生に対する期待は変わらず、同塾で学んだ「思想と教え」に基づいて生活することを求めた。

次のメッセージは津田が1908(明治41)年に、すでに卒業し、学校を離れていた卒業生に向けて伝えられたものである。すなわち、「皆さんの人生がこれからの世代に影響するように、一人ひとりに寄せられた期待は非常に大きい。女性仲間たちは、たとえわずかなことでも皆さんの積極的な協力と支援を、非常に求めているからである」¹²⁾。女子英学塾の卒業生の社会に与える影響の大きさを、津田は以上のように期待を込めて強調している。そして卒業生たちに対して、率先して女性全体の地位向上のために尽力すべきことを訴えかけたのである。

次は1909(明治42)の卒業式での式辞であり、高等教育を受け、高い知識技能をもつ女性の責任とその役割を強調したメッセージである。

皆さんは広い視野を取得できた少数の幸運な女性の一人である。だからこそ、その価値を証明しなくてはならない。日本の女性に対する高等教育はまだ幼児期を迎えており、その成長は未熟である。(中略=引用者) その自然な成長を守ること、あるいは促進し、強力にすることは、今の世代の女性自身とその行動によるものである。教師であれ、主婦であれ、皆さんはパイオニアとしての困難、責任、そして義務を抱えているのである。皆さんの人生と行動は、受けた教育の試験なのである¹³⁾。

高等教育を受けることができた少数の「幸運」な女性に対して、津田がいかに大きな役割を期待し、重い責任を任せようとしたかが、このメッセージから改めて確認できる。すなわち、高等教育を受けた女性は、日本の女子高等教育の発展においてパイオニアとしての義務を抱え、女子高等教育の発展は彼女らの行動によって左右されるほどの重い責任をもつというのである。した

がって津田は卒業生の進路について慎重に考慮していた。塾長室の壁に日本地図が掲げてあり、地図の上に卒業生の就職先を示す「日の丸の旗」がピンでとめてあった¹⁴⁾。津田は卒業生に対し、女学校に勤めることを勧め、次に親の承諾を受けさせ、そして故郷に近い所に勤務地を探したのである。卒業生の森ちえは「先生は絶対安売りをされませんでした」と思い出を記している¹⁵⁾が、津田はよい境遇の勤務先を卒業生のために探し出したのである。

以上の分析から津田が卒業生に期待した点をまとめると、①自己向上を常に心がけること、②習得したものをほかの女性にも分かちこと、③女子教育の普及と女性の地位向上を目指すこと、の3点に要約できよう。津田は女性の社会的地位の向上を実現するために、女性の教養を高めることを目指していた。そのためには、なによりも女子中等教育を広く普及させる必要があると考え、卒業生を教員として全国に送り出したのである。

4. 初期の卒業生の進路

次に、女子英学塾の初期の卒業生の動向とその特質を分析し、津田梅子の卒業生に対する期待がどれだけ現実化されたかについて、家族制度下の女性のライフスタイルも含めて検討する。

分析の対象は第1回から第10回まで(1905年卒から1912年卒まで)の卒業生とする。この中で、第1回から第7回までの卒業生については、8年間から4年間にわたって検討し、個別卒業生がどのような進路を選択し、その後どのような人生を歩んだかを探る。これにより、当時の女性の職業状況および社会や家庭における役割の一端を明らかにすることが出来ると考える。なお、第8回以降の卒業生の進路についても、分析対象の時期は短いがその傾向を分析する。

卒業生の進路は女子英学塾同窓会報に記されている記事に基づいているが、資料的な制約から、検討の期間に限られざるを得ない。このため、卒業生の進路について長いスパンで考え、女性の生き方がどう多様化したのか解明することは困難といえるが、しかしこれらの初期の卒業生たちが女子英学塾で受けた教育を、家庭や社会に対してどれほど貢献することが出来たのか、その一端は明らかにできるであろう。なお、同会報に卒業生の進路に関する記載がなく、その動向を知ることが出来ない期間もある¹⁶⁾。

以下、表1に基づいて卒業生の進路動向を各卒業年に分け、かつ個人の進路の変遷を分析し、人生の歩みの実態を明らかにした上で、最後に全体の分析と類型化を行う。なお、表1及びその解説における用語などはなるべく同窓会報に記されているものを用いるようにした。

表1 女子英学塾の卒業生の進路に関する表 (1903年～1912年)

年 名前	1905年 (明治38年)	1906年 (明治39年)	1907年 (明治40年)	1908年 (明治41年)	1909年 (明治42年)	1910年 (明治43年)	1911年 (明治44年)	1912年 (明治45年)
第1回 H.T.	高等女学校教員 両親の下	高等女学校教員 両親の下	高等女学校教員 個人教授	高等女学校教員 英学会を結成	高等女学校教員 英語の教授	女学院の学監 結婚、英語の教授	_____	_____
1回 E.A.	渡辺家の手伝い	結婚、渡米、帰国	夫の介護	渡米の予定	_____	海外旅行など	海外	_____
9回 W.N.	女学校教員	女学校教員	女学校教員	神学校の舎監	_____	_____	_____	_____
0回 Y.T.	女学校教員、女子	アメリカ留学	アメリカ留学	9月帰国	女子英学塾教員	舎監、家政科担任	病気	女学校教員
3回 T.H.	英学塾助手	_____	_____	_____	_____	_____	_____	_____
(明治36年卒業)	高等女学校教員	高等女学校教員	高等女学校教員	結婚、転居	_____	_____	家事、育児	_____
6回 N.M.	結婚、高等女学校	育児、高等女学校	育児、高等女学校	転居、家事、育児	家事、育児	家事、育児	家事、育児	_____
卒業	教員、出産	教員	教員	高等女学校教員	結婚、海外	海外、出産	海外、家事、育児	_____
	家庭通訳	舎監、家庭教師	家庭教師	高等女学校教員	_____	_____	_____	_____
	女子英学塾教員	女子英学塾教員	高等女学校教員	高等女学校教員	転勤、結婚	女学校辞職、出産	家事、育児	家事、育児
第2回 O.R.	結婚、転居	育児、介護	「平凡な生活」	家事、育児	家事、育児	家事、育児、訳読	_____	_____
1回 O.T.	高等女学校教員	高等女学校教員	アメリカ留学	留学中	家事、育児	結婚、海外	_____	_____
0回 F.H.	商業学校在籍	両親の下	両親の下	両親の下	結婚	_____	家事	家事
4回 I.H.	3児の養育	新聞社勤務	相変わらず	相変わらず	_____	_____	相変わらず	新聞社勤務

名前	1906年 (明治39年)	1907年 (明治40年)	1908年 (明治41年)	1909年 (明治42年)	1910年 (明治43年)	1911年 (明治44年)	1912年 (明治45年)
F.T.				女学校教員	結婚、家庭 相変わらず	出産、育児	家事、育児
U.S.				両親の下		父の助手	
S.T.				音楽の勉強		「平凡な生活」	
O.M.				女学校教員	相変わらず		家事、出産、育児
Y.T.				女学校教員	結婚、家庭	出産、育児	
K.M.				女子英学塾助手		結婚、家庭	家事
H.A.				研究科在籍	女学校教員	女学校教員、舎監	
S.Y.				女子英学塾助手		看護、家事	看護、家事
N.M.				研究科在籍			結婚、高等女学校教員
N.B.				女子英学塾教員、 研究科在籍	高等女学校教員		自宅で画筆
K.T.					家事、妹の世話		女学校教員

第7回1909(明治42)年卒業

年	名前	1912年 (明治45年)
第10回 1912 (明治45)年卒	O.	研究科在籍
	S.	同上
	W.	同上
	A.	同上
	I.	自宅、無職
	S.	同上
	A.	同上
	A.H.	帰省、無職
	T.	同上
	I.	山形に奉職
	T.	秋田に奉職
	T.	米沢に奉職
	A.	長崎に奉職
	M.	広島に奉職
S.	福岡に奉職	
Y.	山口に奉職	
Y.	兵庫に奉職	
K.	名古屋に奉職	
F.	宇都宮に奉職	
O.K.	水戸に奉職	
K.	福井に奉職	

年	名前	1911年 (明治44年)	1912年 (明治45年)
第9回 1911 (明治44)年卒業	S.M.	帰省、無職	—
	T.S.	高等女学校教員	—
	O.K.	高等女学校教員	—
	T.M.	帰省、無職	—
	S.S.	家事	—
	K.H.	帰省、無職	—
	E.S.	高等女学校教員	—
	I.T.	研究科在籍	結婚、家庭
	H.K.	同上	—
	O.I.	同上	女学校教員
	K.T.	同上	—
	F.Y.	同上	—
	T.E.	同上	—
	E.F.	同上	—
S.S.	同上	—	
K.T.	同上	女学校教員	
T.K.	—	高等女学校 教員	
A.S.	—	高等女学校 教員	

年	名前	1910年 (明治43年)	1911年 (明治44年)	1912年 (明治45年)
第8回 1910 (明治43)年卒業	K.T.	無職	—	—
	O.S.	高等女学校教員	—	—
	M.S.	裁縫、家庭教師	結婚、家事	—
	S.S.	高等女学校教員	高等女学校教員	—
	O.H.	女学校教員	女学校教員	—
	U.K.	女学校教員	結婚、海外	海外、家事・育児
	K.Y.	研究科在籍	高等女学校教員	病氣
	T.K.	同上	—	高等女学校教員
	W.Y.	同上	留学	—
	K.M.	同上	女学校教員	女学校教員
	M.S.	同上	—	—
	M.S.	同上	無職	—
	K.N.	同上	—	女子青年会事業
	Y.U.	同上	—	病氣
	T.K.	無職	—	家で書物
	K.S.	—	女学校教員	女学校教員
	O.K.	—	高等女学校	「故郷で書物」

① 第1回1903（明治36）年卒業生

1903（明治36）年の卒業生は8人であり、そのなかで英語教授にかかわった者が7人いる。7人中3人のH.T.、Y.T.、K.H.は女学校教員として英語の教授に従事していることがわかる。H.T.は5年にわたって御茶ノ水高等女学校で教鞭をとり、1910（明治43）年には聖心女学院の学監となっている¹⁷⁾。Y.T.は3年間麻布香蘭女学校に勤めた後、1908（明治41）年に女子神学校の舎監に転任している¹⁸⁾。K.H.は香蘭女学校の教員や女子英学塾の助手を経て、1906（明治39）年にアメリカ留学を果たした。ボストンのSimmons Collegeで家政学を学び、帰国後は女子英学塾の家政科を担当した¹⁹⁾。その2年後に病気が原因で辞職しているが、1912（明治45）年に再就職し、普連土女学校の教員として活躍している²⁰⁾。T.H.、N.M.の2人は1度就職し、T.H.は（東京府立）第一高等女学校で教員、N.M.は女子英学塾の舎監や教員を経て、（東京）府立第一高等女学校の教員となっているが、やはり結婚や転居に伴って辞職し、家庭に入って家事・育児に従事している。N.M.の場合は、結婚、出産後も（東京府立）第一高等女学校で教員を務めているが、3年後に転居と家事・育児の関係で辞職したものと推察できる。F.A.は特殊な例であり、家庭で英語教授を始め、その後英学会という小さな会を設け、結婚後も英語教授に携わっている²¹⁾。このように、同年の卒業生の多くが英語の教授にかかわったことが明らかになるが、結婚や出産に伴い職を離れる傾向がみられ、当時においては家庭と仕事の両立が如何に難しかったかを窺せる。

② 第2回1904（明治37）年卒業生

1904（明治37）年の卒業生はわずか5人に過ぎないが、英語教授を経験した者はI.E.とO.T.の2人である。I.E.は、卒業後数年間は女子英学塾の別科や予備科で英語を教え、1907（明治40）年に大阪に転居し、当地の蘭会高等女学校の教員を務めている²²⁾。しかし、その後の動向をみると、やはり結婚・出産した後、家事と育児に専念し、同校を辞職している。O.T.の場合は、（東京府立）第三高等女学校の教員を経た後アメリカ留学をしているが、留学終了後シカゴで結婚し、その後も海外生活が続いている²³⁾。O.R.とF.H.の2人は職務経験があったと推察されるが、O.R.は卒業後まもなく結婚し家庭に入り、家事・育児に従事したと考えられる。F.H.は卒業後女子商業学校で勉学を続けているが、家事などの多忙が理由で社会に出ることはなく、卒業5年後に結婚し家庭に入っている。ここで特殊な例としてI.H.の場合がある。彼女は3児の養育をしながら、報知新聞社に勤め、7年にわたって執筆活動を行っていることが明らかになる²⁴⁾が、これは家庭と仕事を両立させた非常に珍しい例といえる。第2回目の卒業生の特徴として、英語の教授にかかわった者が少ないことや、かかわった場合も教員を長く続けないことが挙げられる。注目すべき点は、育児をしながら新聞社に勤務していた例があったことである。

③ 第3回1905（明治38）年卒業生

1905（明治38）年の卒業生は9人であり、そのうち4人が教員を経験した。I.K.、H.K.、H.M.は6～7年にわたって女学校で英語教員を勤めている。I.K.はこの期間の6年間は栃木県立宇都宮高等女学校で教鞭をとっている²⁵⁾。H.K.の場合は明確に記されていないが、最初のころは女子英学塾で別科の授業を担当しており、1907（明治40）年に仙台市の宮城女学校に就職し²⁶⁾、その後も同校で教鞭をとったと推測される。H.M.は、教員検定試験に合格し、1906（明治39）年に

東京府立第三高等女学校に就職している²⁷⁾。そして、理由は不明確であるが、次年度からは平河町のミスウェストン方で「教授」していると記されている。そして1年後には山脇高等女学校で教鞭をとったが1909(明治42)年には同校を辞し、平河町マリア館、麻布香蘭女学校、赤十字社看護婦教育部などで英語科を担当している。H.M.は、勤務先がしばしば変わっているが、英語教授に積極的にかかわっていることが確認できる。教員経験がある4人目のN.N.は、最初から家庭に入っており、夫が病気であるため介護生活を続けているが、1908(明治41)年に普連土女学校に就職している²⁸⁾。その2年後には浦和高等女学校で教鞭をとっている²⁹⁾が、翌年から再び結婚して家庭に入り、愛媛に転住した後は家事・育児に追われる生活を送っている³⁰⁾。残りの5人は、就職をしなかった模様で、結婚前と結婚後の家事や、出産・育児、海外生活という類似したライフ・コースをたどったことが確認できる。このように、同年の卒業生は教員になった者と職業を持たなかった者に分かれていた。この年の卒業生では教員を経験していない者が半分以上となっているが、その理由としては結婚年齢が早かったことが考えられる。そのほか、同年の特徴として3人も海外生活を経験していることが挙げられるが、そのような者は外交官と結婚し、夫とともに外国へ出向していたのである。これも女子英学塾の卒業生にみられる傾向のひとつであり、高学歴の女性という点、英語ができるという点で、外交官との結婚が多かったものと考えられる。

④ 第4回1906(明治39)年卒業生

1906(明治39)年の卒業生も同じく9人であり、同年の卒業生に共通な点は、卒業後何らかの形で勉強を続けていることである。その中で、女子英学塾の補習科や教授法の授業に出席した者が多い。9人中5人のH.A.、O.Y.、T.Y.、M.Y.、N.T.は職務経験、つまり教員の経験もっている。H.A.は静岡英和女学校の教員を経て、1907(明治40)年にアメリカ留学を果たし、Miss Kirk's Schoolでの勉学を終了後、プリンマー大学に入学している³¹⁾。O.Y.は1908(明治41)年から母校である東京女学館に就職し、その後もしばらく同校で教鞭をとっている³²⁾。T.Y.は、1906(明治39)年よりミッション・スクールである神戸松蔭女学校に就職し、同校で英語、聖書、裁縫などを教え、後に舎監を務めていることが確認できる³³⁾。M.Y.も1906(明治39)年からしばらく横須賀高等女学校で勤務し、やはり英語科を担当している³⁴⁾。最後のN.T.は卒業後も女子英学塾の教授法の授業に出席し、一年後に普連土女学校で教えながら、女子英学塾の別科主任を勤めている³⁵⁾。彼女はその後も女子英学塾の勤務を続け、同塾に尽力していることが確認できる。U.E.、T.Y.、A.F.は結婚までの短期間勉強などを行っているが、卒業1年後に結婚し、家事、育児中心の生活を送っている。S.Y.の場合は、卒業後1年ぐらいは女子英学塾で別科の手伝いを行っているが、その後は職に就くことがなく、病人の介護やあるときには家庭教師などを行っている。このように、同年の卒業生は長く教員を務めた者と介護や結婚による家事・育児の関係で職業をもたなかった者に大別できる。また、H.A.のようにアメリカ留学を果たし、後年女子英学塾の塾長として同塾に尽力した者もいた。職業をもたなかった者に関してはやはり早婚が原因であったと考えられる。

⑤ 第5回1907（明治40）年卒業生

1907（明治40）年の卒業生はそれまでより多く12人に及んでおり、その半数以下の5人が女学校教員として英語の教授に従事している。まず、その5人の動向を確認する。K.F.とH.C.は6年間を通して女学校の教員を務めており、K.F.はこの間京都舞鶴高等女学校で教鞭をとっている³⁶⁾。H.C.は卒業後まもなく神田共立女学校に就職し、次年度から女子師範学校に転任し、同校が（東京府立）第二高等女学校と併置されていたため、彼女は高等女学校の方も兼任している³⁷⁾。その後しばらく両校で勤務していることが確認できるが、1912（明治45）年の記述には第二高等女学校しか記されていない。彼女は女学校で英語のほかに、国語や修身まで教えていたと記している。A.K.は卒業後介護などで忙しく、1年後に甲府英和女学校というキリスト教系学校に赴任している。2年後の1910（明治43）年には宇都宮高等女学校に転任し、しばらく同校で教鞭をとっている³⁸⁾。M.M.は卒業直後から宇都宮高等女学校に就職し³⁹⁾、その後しばらく同校で英語科を担当している。1910（明治43）年に神経痛が原因で、3ヶ月休職し、翌年には病気が悪化して辞職している。E.S.は卒業後香蘭女学校に就任し、同校で教えながら女子英学塾の別科の手伝いをし、翌年から同塾の研究科に在籍している。彼女はその後しばらく香蘭女学校で小さい子供を相手に英語を教えているが、1911（明治44）年は女学校に関する記載はなく、5～6人の家庭教師をしていることが記されている。

次いで、残りの7人の動向について述べる。残りの7人は卒業後何らかの形で勉学を継続したり、教えたりしているが、おおよそ結婚し家庭に入ったパターンと、両親の下で園芸を楽しみ、または農業を手伝うなどのパターンと、海外生活をしているパターンがあることがわかる。以上のように、同年にみられる特徴に、職業をもたなかった者が多かったことが挙げられる。結婚が主な理由と考えられるが、結婚をせず職業をもたなかった者も何人かいる。結婚している者の2が同じく海外生活をしている。

⑥ 第6回1908（明治41）年卒業生

1908（明治41）年の卒業生はわずか6人であり、その4人が職務経験をもっている。この年の卒業生は、卒業後引き続き女子英学塾の研究科に在籍している者が4人もいるが、これは同年に研究科が新設されたことに関係する。K.M.とI.S.は女子英学塾の助手を経て、K.M.は浅草の高等女学校、教員検定試験に合格した後は普連土女学校で、そしてI.S.は母校（東京）府立第一高等女学校で教鞭をとっている⁴⁰⁾。F.T.は卒業後家庭教師などをし、1年後に立教高等女学校、その翌年の1910（明治43）年に山脇高等女学校に就職し⁴¹⁾、同校で英語教授に従事している。O.N.は卒業後結婚し、家庭に入っているが、家庭教師などをして英語を教えている。Y.T.は卒業後岡山に帰郷し、その後の動向は不明である。最後のS.Y.はそれまでの人と違った職業、つまり女子英学塾の女子青年会の事業に長期にわたってかわかり、主に事務の仕事をしている⁴²⁾。このように、同年は職業をもった者の割合が大きいうことができ、就職しない者でも家庭教師を務めている。また、女子青年会の事務員という職業は同塾の卒業生の中で新しい職業として現れている。

⑦ 第7回1909（明治42）年卒業生

1909（明治42）年の卒業生は13人であるが、2人の進路に関する記載がないため、ここでは11人の動向を分析する。11人中8人が女学校の教員を経験しており、3人は卒業後女子英学塾で1年ほど別科や予備科の授業を手伝うなどして、英語を教えている。H.A.とN.M.は女子英学塾で授業を受け持った後、女学校に就職している。H.A.は大阪のプール女学校の英語教員となり⁴³⁾、後に舎監も担当しており、N.M.は下関高等女学校で教鞭をとっている⁴⁴⁾。S.Y.とN.M.の2人は1回就職し社会に進出しているが、その後事情が許さず、仕事を継続していないとみることができる。S.Y.は香蘭女学校で教員をしているが、まもなく辞職し、親の看護や家事手伝いをしている。N.M.は広島県立高等女学校に就職し⁴⁵⁾、理由は不明だが1912（明治45）年に自宅で画筆をしていると記されている。F.T.、O.M.、Y.T.、K.M.の4人は1度就職し、女子英学塾や女学校の教員を務めているが、結婚した後、家事・育児との両立が難しくなり、辞職したと推察される。F.T.は大阪プール女学校、O.M.は仙台市宮城女学校、Y.T.は名古屋金城女学校で就職している。U.S.とS.T.は両親の下で家事を手伝い、音楽などの勉強をしており、職務経験がないと考えられる。同年の卒業生に見られる傾向は、卒業後は就職をし、結婚後は辞職をしていることである。11人中9人が教員を経験していることになるが、7人が結婚後辞職している。職業を持ってたとしても、結婚後は事情が許さず、辞職していることは、当時において女性が仕事を持続させることの難しさを窺わせる。

⑧ 第8回卒業生から第10回卒業生まで

次に、第8回から第10回までの卒業生の動向を概観する。1910（明治43）年の第8回から卒業生は著しく増加し、その人数は1910（明治43）年に24人、1911（明治44）年には21人、1912（明治45）年には26人に上っている。同塾同窓会報にある記事に限られるが、第8回卒業生から分析すると、同年は卒業後すぐ就職した者は24人中わずか4人で、女子英学塾の研究科に進学した者8人、1年以後就職した者4人となっている。その他、「裁縫」、家庭教師、自宅で読書、病気、無職、記載がない者が9人である。卒業後2、3年も含めた就職者中で女学校に就職し、病気や結婚と海外移動に伴い辞職している者は2人である。その他の就職者の勤務先は、甲府高等女学校、姫路高等女学校、名古屋金城女学校、学習院女子部、浦和高等女学校、桐生高等女学校などである⁴⁶⁾。

1911（明治44）年の第9回卒業生21人中、卒業直後就職した者は2人、研究科に進学した者は9人、1年後就職した者は5人、故郷に戻り職に就いていない者は3人、記載がない者は2人となっている。その後に就職した者も含め、勤務先としては金沢市の県立高等女学校、沼津高等女学校、米沢市の県立高等女学校、徳島県立高等女学校、三浦の県立高等女学校、大津高等女学校、広島市の県立高等女学校などがある⁴⁷⁾。

第10回1912（明治45）年の卒業生26人中、女子英学塾の研究科に進学した者は4人、地方（山形、秋田、米沢、長崎、広島、福岡、山口、兵庫、名古屋、宇都宮、水戸、福井）の学校に奉職した者は12人、故郷に帰り職業に就いていない者は2人、東京で職業に就いていない者は3人、記載がない者は5人である⁴⁸⁾。

以上、最後の3年間は長い期間に亘って考察できなかったため、卒業生の動向の特徴を把握することは難しい。しかし、最後の3年間の状況を通して、卒業直後に研究科に在籍する者や、女学校に就職する者が増加しつつあったとみることができる。そして、大きな変化として、卒業生の地方への就職が増えたことが挙げられる。同塾卒業者の最初の数年間の就職先は関東近辺が多かったのが、年々地方の学校への就職者数が上昇した。これは、日本の各地において高等女学校が普及したこと、同塾卒業者の英語教員としての信頼が高まったことが要因であったと推察される。

以上の考察を通して明らかになったことは以下のとおりである。対象とした116人中、女学校の教員を務めた者の総数は61人であった。これはきわめて高い割合であると考えてよいだろう。また、その他の職業に就いた者は4人、職業をもたず、家事や育児に従事したと考えられる者は39人であった。海外生活を経験した者は10人、その中で留学した者は3人いた。このように、教員以外の職業として、新聞社への執筆、女子青年会の事務、家庭教師などはわずかであり、同塾を卒業した女性の職業はほぼ教員に限られていたといえよう。さらには、途中で辞職している者が61人中17人みられ、第9回・第10回卒業生に関してはその後の動向を把握していないものの、時間が経過するにつれて退職者の割合は上昇するものと推察される。

このように、女子英学塾の卒業生の多くに当てはまる進路として、主に女学校や高等女学校の教員になることが第1に挙げられ、それ以外は結婚し家庭生活に従事するという2通りの進路にほぼ決定付けられていたことが明らかとなった。なお、留学をした者や外交官などと結婚し、海外生活を送った者も少なからずみられるが、これも英語を得意とする女子英学塾の卒業生にみられる特徴の一つであろう。

一方、女子英学塾と同時期に女子専門学校として認可された、日本女子大学学校や青山女学院などにおいて卒業生の就業状況はどうであったのだろうか。日本女子大学校の場合は、同じ時期の状況は把握できないが、大正前期の調査で確認すると、43.0%の卒業生が職業に就いているが、勤続年数が1～5年の卒業生は、全学で26.4%を占め、勤続年数が6～10年になると9.9%に下がっている⁴⁹⁾。青山女学院の場合は、全体の就職状況は把握できないが、明治期に文部省の中等教員検定試験に合格し、英語の教員として就職した者はわずか9人に過ぎない⁵⁰⁾。

ここで、中等教員検定試験との関連で述べると、女子英学塾は上述のように創立5年後の1905(明治38)年に「英語科」教員の無試験検定の資格を取得していた。これは英語科として最初の特典であり⁵¹⁾、この特典は1923(大正12)年、日本女子大学校英文学部に無試験検定が許可されるまでは、同塾の独占であった。一方、青山女学院の場合は、1913(大正2)年に無試験検定認可を文部省に申請したが文部省による調査の結果、不認可となっている⁵²⁾。このような事実から見ると、無試験検定という特典を獲得していた女子英学塾の卒業生は英語科教員として就職しやすく、この点が同塾卒業者の特徴となったといえよう。

5. おわりに

本論文では、津田梅子の教育のねらいと「女性像」を検討し、次に津田が女子英学塾の卒業生に何を期待したのか明らかにした。最後に、同窓会報によって同塾の個別卒業生の進路とその後

を1906（明治36）年から1912（明治45）年まで分析し、その実態を明らかにした。

考察の結果、津田が期待したように、同塾の教育理念は卒業生を通じて徐々に具体化されていったことが明らかとなった。すなわち、初期の卒業生であるものの、116人中61人、つまり半分以上が女学校の教員を経験していることは、当時の社会の風潮や女性の就職状況を考えると特筆すべきことであり、この時期は「職業婦人」が誕生し、女性に職業の途がわずかながらも開かれた大正期に入る前の時代であったことも念頭におく必要がある。

また、本論文で明らかになったように、せっかく就職をしても結婚後は辞職をしている卒業生が多く、当時においては就職と結婚の両立が極めて困難であることが確認できるが、このような状況の中でも、同塾の教育理念は社会の広範囲にわたって影響を及ぼしていくこととなる。卒業生の回顧によると、「主婦」の路を歩んだ人でさえその教育がいかに意義深いものであったのかを認識しているのである⁵³⁾。

このように、女子英学塾の教育は、人間性を高めるだけでその役割を終えず、主婦となっても生活を充実させることのできるものであったことが卒業生の回顧録から知ることが出来るが、津田は女性に対して結婚と仕事の双方を重視したのである⁵⁴⁾。津田は、女性には結婚だけではなく仕事をもつことも同時に重要であることを強く認識していた。そして、結婚を理由に仕事を辞めざるを得ない卒業生が数多く存在していた⁵⁵⁾が、社会に出ることなく家庭に入る女性が多かった当時の現実下においては、津田が示したこうした形での仕事と結婚の両立こそが、もっとも現実的で革新的な方策であったに違いない。

今後の課題としては、同塾卒業生の進路状況を長期にわたって分析し、時代の変遷によって同塾卒業生の就業状況がどう変化し、どう発展したのか明らかにしていきたい。また、進路以外の領域についても同様の分析を試み、津田梅子の教育理念が日本の社会および女性の自立や地位向上に及ぼした影響を具体的に検討したい。それと同時に、同時期に創設された女子専門学校の卒業生の進路状況についても同様の調査を行い、女子英学塾の卒業生の進路状況の特徴を明確にしたい。

註

- 1) 英和女学校（現在の神戸女学院）、フェリス女学校、青山女学院、明治女学校など。
- 2) 筆者による津田梅子の教育思想に関する次の論文を参照されたい。Nilufar Mamatkulova「津田梅子の教育思想の特質に関する一考察 ～女性の自立と地位向上をめぐる視点から～」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』別冊第17号-2、早稲田大学大学院教育学研究科、2009年、109～120ページ。
- 3) 「The Education of Japanese Women」、『津田梅子文書』、改訂版、津田塾大学、1984年、英文、23ページ。
- 4) 『津田梅子文書』、英文、22ページ、訳＝筆者。
- 5) 女子英学塾同窓会『会報』記念号、1910年、英文、1ページ。
- 6) 『津田梅子文書』、日本文、1～4ページ。
- 7) 1914（大正3）年の軽井沢で行った講演の一部による。吉川利一『津田梅子』、272～273ページに掲載されている。

- 8) 村上信彦「女の職業」『明治女性史』、中巻後編、理論社、1971年による。
- 9) 吉田昇、神田道子編『現代女性の意識と生活』日本放送出版協会、1975年、154ページ。
- 10) 『東京都教育史』通史編3、東京都立教育研究所編集、1996年、164ページ。
- 11) 女子英学塾同窓会『会報』第2号、1906年、英文、1～2ページ、訳=筆者。
- 12) 女子英学塾同窓会『会報』第4号、1907年、英文、2ページ、訳=筆者。
- 13) 女子英学塾同窓会『会報』第5号、1909年、英文、1～2ページ、訳=筆者。
- 14) 津田塾大学編『津田塾オーラル・ヒストリー・シリーズ 卒業生に聞く』第1号、1980年、13ページ。
- 15) 津田塾大学編『津田塾オーラル・ヒストリー・シリーズ 卒業生に聞く』第3号、1989年、5～6ページ。
- 16) 女子英学塾同窓会『会報』第1号(1905年)、第2号(1906年)、第3号(1907年)、第4号(1908年)、第5号(1909年)、第6号(1910年)、第7号(1911年6月)、第8号(1911年12月)、第9号(1912年)に基づく。
- 17) 女子英学塾同窓会『会報』第6号、1910年、34ページ。
- 18) 女子英学塾同窓会『会報』第4号、1908年、34ページ。
- 19) 前掲資料『会報』第4号、1908年、34ページ、前掲資料『会報』第5号、31ページ。
- 20) 女子英学塾同窓会『会報』第9号、1912年、42ページ。
- 21) 女子英学塾同窓会『会報』第6号、1910年、33ページ。
- 22) 前掲資料『会報』第4号、35ページ。
- 23) 前掲資料『会報』第6号、34ページ。
- 24) 前掲資料『会報』第1号、55ページ、前掲資料『会報』第9号、42ページ。
- 25) 前掲資料『会報』第2号、47～48ページ、前掲資料『会報』第6号、34ページ。
- 26) 女子英学塾同窓会『会報』第3号、1907年、37ページ。
- 27) 前掲資料『会報』第2号、48ページ。
- 28) 前掲資料『会報』第4号、36ページ。
- 29) 前掲資料『会報』第6号、34ページ。
- 30) 前掲資料『会報』第9号、43ページ。
- 31) 前掲資料『会報』第4号、36～37ページ。
- 32) 同前資料『会報』第4号、37ページ、前掲資料『会報』第7号、34ページ。
- 33) 前掲資料『会報』第3号、39ページ、前掲資料『会報』第9号、43ページ。
- 34) 前掲資料『会報』第3号、40ページ、女子英学塾同窓会『会報』第8号、1911年、26ページ。
- 35) 前掲資料『会報』第3号、38～39ページ。
- 36) 同前資料『会報』第3号、41ページ。
- 37) 前掲資料『会報』第4号、41ページ、前掲資料『会報』第5号、38～39ページ。
- 38) 女子英学塾同窓会『会報』第7号、1910年、36ページ。
- 39) 前掲資料『会報』第3号、40ページ。
- 40) 前掲資料『会報』第7号、36ページ。
- 41) 前掲資料『会報』第6号、36ページ。
- 42) 前掲資料『会報』第5号、39ページ、前掲資料『会報』第7号、36ページ。
- 43) 前掲資料『会報』第6号、37ページ。
- 44) 前掲資料『会報』第9号、45ページ。
- 45) 前掲資料『会報』第6号、37ページ。
- 46) 同前資料『会報』第6号、38～39ページ、前掲資料『会報』第7号、38～39ページ、前掲資料『会報』

- 報』第9号、36～38ページ。
- 47) 前掲資料『会報』第7号、39～40ページ、前掲資料『会報』第8号、27～28ページ、前掲資料『会報』第9号、48～49ページ。
 - 48) 前掲資料『会報』第9号、49ページ。
 - 49) 山本和代、落合孝子「大正期の卒業生の卒業後の生活」、日本女子大学女子教育研究所編『大正の女子教育』国土社、1975年、244ページ。
 - 50) 青山学院校友会女子短期大学部会『青山女学院史』青山さゆり会、1973年、184ページ。
 - 51) 『津田英学塾四十年史』、92ページ。
 - 52) 前掲書『青山女学院史』183ページ。
 - 53) 女子英学塾同窓会『会報』第3号、1907年、日本文、39ページ、藤岡保子による。
 - 54) 前掲資料『津田塾オーラル・ヒストリー・シリーズ 卒業生に聞く』第3号、5ページ。
 - 55) 津田塾大学編『津田塾オーラル・ヒストリー・シリーズ 卒業生に聞く』第8号、1990年、11ページ。

